

# Osaka Mozart Ensemble

## 58. Konzert „Mozart als Arrangeur“

Toyonaka Aqua Bunka Hall

Montag, 13. Januar, 2014, 14.00 Uhr

《Programm》

Karl Friedrich Abel (1723-1787)

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

Sinfonie (Nr. 3) Es-Dur KV 18 (KV<sup>3</sup> Anh. 109<sup>I</sup>; KV<sup>6</sup> Anh. A51), 1764/1765

交響曲 (第3番) 変ホ長調 KV 18 (KV<sup>3</sup> Anh. 109<sup>I</sup>; KV<sup>6</sup> Anh. A51), 1764/1765

I. Molto Allegro

II. Andante

III. Presto

Johann Sebastian Bach (1685-1750)

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

Fünf Fugen aus dem „Wohltemperierten Klavier“ Teil II KV 405, 1782/1783

5つのフーガ KV 405, 1782/1783

I. nach Fuge c-moll BWV 871

II. nach Fuge Es-Dur BWV 876

III. nach Fuge E-Dur BWV 878

IV. nach Fuge dis-moll BWV 877

V. nach Fuge D-Dur BWV 874

Johann Sebastian Bach (1685-1750)

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

Fuge aus dem „Wohltemperierten Klavier“ Teil II Nr.22 in b KV deest, 1782/1783

フーガ ハ短調 KV deest, 1782/1783

I. nach Fuge c-moll BWV 891

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

Adagio und Fuga c-moll KV 546, 1783

アダージョとフーガ ハ短調 KV 546, 1783

Adagio – *FUGA*: *Allegro*

George Frideric Händel (1685-1759)  
Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

**“Der Messias” Overtura e-moll KV 572, 1789**

「メサイア」序曲 ホ短調 KV 572, 1789

Grave – Allegro moderato

．．．．． 休憩 Pause ．．．．．

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)  
Johann Nepomuk Wendt (1745-1801)

**Harmoniemusik nach Die Entführung aus dem Serail, 1782**

管楽合奏のための「後宮からの誘拐」変ロ長調, 1782

- I. Overtura: Presto
- II. “Hier soll ich Dich denn sehen”: Andante
- III. “Ich gehe, doch rate ich Dir”: Allegro
- IV. “Durch Zärtlichkeit und Schmeicheln”: Andante grazioso
- V. “Wenn der Freude Tränen fließen”: Allegro vivace
- VI. “Ha, wie will ich triumphieren”: Allegro vivace
- VII. “Welche Wonne, welche Lust”: Allegro
- VIII. “Vivat Bachus, Bachus lebe”: Allegretto

Johann Michael Haydn (1737-1806)  
Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

**Sinfonie (Nr. 37) G-Dur KV 444 (KV<sup>3</sup> 425<sup>a</sup>; KV<sup>6</sup> Anh. A53), 1784**

交響曲（第 37 番）ト長調 KV 444 (KV<sup>3</sup> 425<sup>a</sup>; KV<sup>6</sup> Anh. A53), 1784

- I. Adagio maestoso – Allegro con spirito
- II. Andante sostenuto
- III. Finale: Allegro molto

## 編曲家としてのモーツァルト

大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

カール・フリードリヒ・アーベルは、1723年12月22日、ドイツ・ザクセン地方のケーテンに生まれた。彼の父、クリスティアン・フェルディナントは、チェロとヴィオラ・ダ・ガンバの名手で息子の良き教師でもあった。ケーテンの宮廷には、1717年から楽長を務めていたヨーハン・ゼバスティアン・バッハがいたが、1723年5月22日、彼は、ケーテンの南東約70kmにある、ライプツィヒ・聖トーマス教会の聖トーマス教会附属学校カントル兼市音楽監督(トーマス・カントル)に就任している。K. F. アーベルは、ライプツィヒのトーマス学校の生徒としてJ. S. バッハの教育を受けることになり、1748年、バッハの推薦でヨーハン・アドルフ・ハッセが率いるドレスデン宮廷楽団のメンバーとなった。7年戦争(1756年～1763年)の混乱のためにザクセンを離れたアーベルは、イタリアで活動後、1759年3月、ロンドンに居を構えた。彼はすぐに、シャーロット王妃とヨーク公の寵愛を受けることになる。ロンドンデビューは1759年4月5日、ソーホーのディーン・ストリートにある大ホールで開いた自身の演奏会であった。ヴィオラ・ダ・ガンバとクラヴィーアのための協奏曲、オーボエ協奏曲など全て彼自身の作品が演奏された。

1762年の秋、J. S. バッハの末子、ヨーハン・クリスティアン・バッハが王妃の教師としてロンドンに着任した。故郷を同じくする二人は、すぐに異国の地で打ち解け、1764年2月29日には、ジョイントコンサートを行っている。その後、二人が企画したバッハ＝アーベル・コンサートは、貴族社会で長年にわたって支持されることになる。1765年1月23日、テレサ・コーネリズ夫人の協力を得て、第1回目の演奏会がソーホー・スクエアのカーライル・ハウスで行われた。バッハ＝アーベル・コンサートは年に15回開かれ、1768年からはオーマックス・ホールで、1775年には、彼らの所有となったハノーヴァー・スクエア・ルームズにその場を移し、1782年、J. C. バッハが亡くなる前年まで続けられた。バッハの死後、アーベルは、急に郷愁の念にかられたのかドイツを訪れ、そこで演奏会を開いて各地で称賛を浴びた後、パリに立ち寄った。彼は、血管破裂を起こして長い間音楽活動ができなくなるほどワ

イン好きで、毎年夏には、お気に入りのワインを味わうためにある裕福な地主の招待を受けてパリに旅行する習慣になっていた。1785年、ロンドンに戻った彼は、1787年6月20日、63歳で没した。

アーベルは、数多くの交響曲、協奏曲、室内楽、特にヴィオラ・ダ・ガンバのための曲を作曲した。本日、演奏する交響曲 変ホ長調 作品7の6は、モーツァルトの自筆総譜が残されていたことから、長らくモーツァルトの交響曲第3番 変ホ長調 KV 18とされてきた曲である。1764年4月23日、ロンドンに到着した8歳のモーツァルトは、バッハ＝アーベル・コンサートで、バッハとアーベルの音楽に深い感銘を受けることになる。1765年7月24日にロンドンを発つまでの15ヶ月間、モーツァルトはこの偉大な2人の作曲家から様々なことを学んだ。モーツァルトが最初の交響曲を作曲したのは1764年の夏と考えられている。

父を死の入り口まで連れてきた危険な喉の病気を治すために、(1764年)8月5日、ロンドン郊外チェルシーの家を借りなければなりませんでした。・・・父が重病で臥せていたので、私達は鍵盤楽器に触れることを許されませんでした。そのため弟は暇つぶしに、オーケストラの全ての楽器、特にトランペットとティンパニを含んだ、最初のシンフォニーを作曲することになったのです。私は弟の横に座ってそれを写譜していかなければなりませんでした。弟が作曲し、私が写譜している間、弟は私にこう言いました。「ホルンが何か価値あることを出来るように僕に注意してね!」・・・それから2ヵ月後、父はすっかり良くなって私達はロンドンに戻りました。

これは、モーツァルトの姉マリア・アンナが1799年(当時48歳)に35年前の亡き弟を回想した記録(アルゲマイネ・ムジカーリッシュェ・ツァイトゥンク、ライプツィヒ、1800年1月22日号)である。「最初のシンフォニー」であ

る交響曲 第1番 変ホ長調 KV 16にトランペットやティンパニは使われていない。姉の古い記憶のため、記録の正確さには多少問題があると思われるが、幼いモーツァルトの創作過程を窺い知る上で興味深い。

交響曲 第3番 変ホ長調 KV 18 (KV<sup>3</sup> Anh. 109<sup>5</sup>; KV<sup>6</sup> Anh. A51)が書かれた経緯は分かっていないが、アラン・タイソンが行った、五線紙の透かし模様の研究によると、この交響曲と「最初のシンフォニー」にはロンドンで購入した12段の同じ五線紙が使用されている。おそらく、交響曲の学習のために、モーツァルトが耳にしたアーベルの美しい交響曲をそっくりそのまま写譜したのであろう。ちなみに楽器の指定、拍子や調性の記号、アコラーデ ( { ), 速度表示は父レーオポルトの手によることが、ヴォルフガンク・プラートの筆跡鑑定で明らかになっている。楽器の指定は、上から順に、Violino 1, Violino 2<sup>o</sup>, 2 Clarinetti, 2 Corni, Viola, Fagotto et Basso の合計6段が使用され、2本のクラリネット、2本のホルン、ファゴット及びバスはそれぞれ1段に記載されている。原曲であるアーベルの6つの交響曲作品7は、1766年、アムステルダムファンメルから出版された。交響曲の標題は、SIX SIMPHONIES a Deux Violons, Taille & Basse, Deux Hautois & Deux Corns de Chasse.となっており、クラリネットではなくオーボエの指定になっている。

ロンドンにはザルツブルクにはないクラリネットがあった。バッハやアーベルもオペラや交響曲でたびたび使用していた。モーツァルトの父レーオポルトも、1764年6月28日、ザルツブルクの家主ローレンツ・ハーゲナウアーに宛てた手紙の中で、ラニラの庭園でヴァルトホルン、クラリネット2本、ファゴットの四重奏が午後10時から11時あるいは12時まで演奏されていることを伝えている。これまで、モーツァルトが編曲した際に、彼独自の考えでオーボエからクラリネットに変更したと考えられてきた。しかし、最近では、1760年から1770年当時、ごく普通にオーボエの代わりにクラリネットで演奏していた可能性が指摘されている。おそらく、モーツァルトがこの交響曲を聞いた時はクラリネットで演奏されていたのであろう。

また、第一楽章の19小節目や第二楽章のフィナーレの25小節目に、ファゴットのソロが出てくるが、アムステルダムファンメルから出版された原曲は、Viol: Solo との記載があり、チェロの指定になっている。ファゴットのソロも、モーツァルトのアイデアかと思われたが、1767年頃にロン

ドンのロバート・プレムナーから出版された楽譜には Fag: Solo と指定があり、この部分も、もともとアーベル自身がファゴットとクラリネットの管楽合奏を意図していたことが分かっている。では、この曲はアーベルの交響曲の完全な筆写譜なのかと言うと、そうではない。音符単位でみれば至る所に、モーツァルト独自の変更点があり、第二楽章には、ファゴットに独立した声部を与えている。

モーツァルト一家が1年と3カ月間、ロンドンに滞在した際、コヴェント・ガーデン劇場では、後年、モーツァルトが編曲することになるヘンデルのオラトリオ『アレクサンダーの饗宴』や『メサイア』が演奏されていた。彼は、学習のためにヨーハン・クリスティアン・バッハの作品の編曲も手掛けた。1772年の春にザルツブルクで編曲されたクラヴィア協奏曲ニ長調 KV 107 (21b), I、ト長調 KV 107 (21b), II、変ホ長調 KV 107 (21b), III の原曲は、それぞれ、バッハのクラヴィア・ソナタ作品5の2、作品5の3、作品5の4である。そのほか、1767年4月から7月にかけてザルツブルクで作曲したクラヴィア協奏曲第1番ニ長調 KV 37、第2番変ロ長調 KV 39、第3番ニ長調 KV 40、第4番ト長調 KV 41 も、ヘルマン・フリードリヒ・ラウバッハ、レオンツィ・ホーナウア、ヨーハン・ショーベルト、ヨーハン・ゴットフリート・エックルト、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハなどのクラヴィア・ソナタを編曲したものである。

1781年11月23日、アウエルンハンマー邸で行われた演奏会にゴットフリート・ベルンハルト・ヴァン・スヴィーテン男爵が来ていた。ヴァン・スヴィーテン男爵は、マリア・テレジアの侍医であったオランダの医師ヘラルト・ヴァン・スヴィーテンの長男で、1755年から外交官としてブリュッセル、パリ、ワルシャワなどに滞在した。1770年、プロイセン宮廷特派大使としてベルリンに赴任。そこで彼は、フリードリヒ大王と交友関係を持つことになり、1768年まで大王に仕えた大バッハの次男カール・フィリップ・エマヌエル・バッハや大バッハの長男ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハとも交流を持った。フリードリヒ II 世の妹アンナ・アマールイエ王女の音楽サークルでヘンデルや大バッハの音楽に傾倒し、1777年にヴィーンに戻った際、『フーガの技法』、『良く調律されたクラヴィア曲集』、『オルガン三重奏曲』、『プレリュードとフーガ』など、数々の大バッハの作品を持ち帰った。ヴィーンでは、宮廷図書館の長官、文部省長官、検閲庁長官を務めている。1782年から宮廷図書館の中にあつたヴァン・スヴィーテン男爵

の邸で、毎日曜日に音楽協会(ヴァーン楽友協会の前身)の集  
会があり、コンサートが催されていた。ヴァン・スヴィーテン男爵と  
親交をもったモーツァルトは、1782年4月10日付の父に宛て  
た手紙のなかで、フーガを勉強したいので楽譜を送ってほしい、  
と依頼している。

ヘンデルの6つのフーガと、エーベルリーンのトッカータとフ  
ーガも一緒に送ってください。——ぼくは毎日曜日、12時に、ヴ  
ァン・スヴィーテン男爵のところへ行きます。——そこでは、ヘン  
デルとバッハ以外は何も演奏されません。——

ぼくはいま、バッハのフーガを集めています。ゼバスティアン  
の作品だけでなく、エマヌエルやフリーデマン・バッハのものも含  
めてです。——それからヘンデルのもの。そして、……だけが  
欠けています。——男爵にはエーベルリーンの作品を聴かせて  
あげたいのです。——イギリスのバッハが亡くなったことはもう御  
存知ですね?——音楽界にとってなんという損失でしょう!

10日後、4月20日付の姉への手紙に、前奏曲と三声のフー  
ガ ハ長調 KV 397 (383a)を作曲することになった経緯を述べて  
いる。

ぼくは毎日曜日、ヴァン・スヴィーテン男爵ところへ通って  
いますが、男爵はヘンデルとゼバスティアン・バッハの作品を(ぼく  
が彼に弾いて聴かせたあと)全部、家に持ち帰らせてくれました。  
——コンスタンツェはそのフーガを聴くとすっかり夢中になっ  
てしま—今ではフーガ、特に(この種のものでは)ヘンデルとバ  
ッハの作品しか聴こうとしません。——彼女はぼくが即興でフ  
ーガを弾くのをよく耳にしていたので、ぼくはまだフーガを書いたこ  
とはないのかと尋ねました。——ぼくが「ない」と答えると、すべて  
の音楽様式のなかでいちばん技巧的で美しいこのフーガを作曲  
したことがないなんて、と手厳しくぼくを責め、しきりにせがむ  
ので、彼女のためにフーガを一曲書くことになった——と、まあ  
こういうわけです。

この曲はあまり速く弾いてほしくないの、わざわざアンダン  
テ・マエストロと記しておきました。——フーガはゆっくり演奏さ  
れないと、テーマが出てきたときに、それをはっきり聴き分けられ  
ないし、その結果、効果がまったくなくなってしまうからです。…  
(中略)…もし、パパがエーベルリーンの作品をまだ写譜しても  
らっていなかったら、そのほうがかえってよかったと思います。—  
—ぼくのほうでもそれを手に入れたのですが——今になって、  
いままで忘れていたのですが——この曲は残念ながらヘンデル

やバッハのものとは並べるにはあまりに陳腐な作品であることが分  
かったからです。あの四声の作曲法をみると——彼のクラヴィー  
ア・フーガは長たらしいヴァーゼットにすぎません。

モーツァルトのフーガ収集は続く。1783年12月6日付の父  
への手紙には、ゼバスティアン・バッハのフーガの送付を依頼し  
ている。

ぼくの『イドメーネオ』と——2つの『ヴァイオリン二重奏曲』—  
—それからゼバスティアン・バッハのフーガをできるだけ早く送っ  
てくださいね。

1783年12月24日付の父への手紙では、ゼバスティアン・  
バッハのフーガを催促すると同時にエマヌエル・バッハの6つ  
のフーガの送付を依頼している。

もう一度お願いしますが、例の2つの二重奏曲とバッハのフ  
ーガ、それから何よりも『イドメーネオ』を送ってください。…(中  
略)…エマヌエル・バッハのフーガを(6曲あると思いますが)  
写譜して、いつか送ってもらえるととてもありがたいのですが。—  
—ザルツブルクでこれをお願いするのを忘れてしまったのです。

その後モーツァルトは、バッハ親子やヘンデルのフーガを研  
究し、数多くのフーガを編曲したが、その多くは、断片でしか残  
されていない。本日演奏する『5つのフーガ』KV 405は、もとも  
とバッハの『良く調律されたクラヴィーアのための曲集 第2巻』  
に含まれる曲で、モーツァルトはこの曲集の中から、以下の5曲  
を選んで弦楽四重奏に編曲した。4番目のフーガの原曲はシャ  
ープ6つの嬰二短調で弦楽器には弾きづらいので、フラット1つ  
の二短調に変更されている以外は同じ調性で書かれている。

#### 【バッハの原曲】

第2番ハ短調 BWV 871

第7番変ホ長調 BWV 876

第9番ホ長調 BWV 878

第8番嬰二短調 BWV 877

第5番二長調 BWV 874

#### 【モーツァルトの編曲】

第1番ハ短調 KV 405, 1

第2番変ホ長調 KV 405, 2

第3番ホ長調 KV405, 3

第4番二短調 KV405, 4

第5番二長調 KV405, 5

このフーガがいつ編曲されたかは、分かっていない。1782  
年4月ごろに作曲し、1783年7月~10月の里帰りの際に持参  
して父に渡したが、12月になってモーツァルトが編曲した「ゼバ

ステファン・バッハのフーガ」を送り返すようお願いしたのではないかと考えられている。当時、こういったセット物は 6 曲で構成されることが多い。上述したアーベルの交響曲も 6 曲一組で出版されている。ヘンデルのフーガもエマヌエル・バッハのフーガも 6 曲である。なぜモーツァルトが編曲したフーガは「5 つ」なのか。オプフェンバックの出版社ヨーハン・アントン・アンドレが、1799 年～1800 年にモーツァルト未亡人コンスタンツェから遺品を購入した際、この『5 つのフーガ』KV 405 も入っていた。しかし実際には、アンドレから、『モーツァルト編曲：2 つのヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための J.S.バッハの 6 つのフーガ』が出版されていたのだ。

失われた「第 6 番」は、1966 年、ゲルハルト・クロールによりブルノのモラヴィア博物館で発見された。筆跡鑑定の結果、39 小節目まではモーツァルトの直筆で、それ以降は、マキシミリアン・シュタードラーが補筆したものであることが判明した。曲は、ハ短調で書かれていたが、バッハの『良く調律されたクラヴィーアのための曲集 第 2 巻』第 22 番短調 BWV 891 の編曲であった。ただし、『5 つのフーガ』の楽譜が 17.4 x 24.5 cm であるのに対して、「第 6 番」は 20.3 x 30 cm でサイズが異なることから、当初から『5 つのフーガ』がセットとして製本されていたことになる。しかし、アラン・タイソンが五線紙の透かし模様を調べた結果、この両者は 1781 年から 1784 年にかけて使用された全く同じ五線紙が使用されていることが判明した。サイズの違いは、五線紙を裁断した際、そうなってしまったのであろう。間違いなく、これらの曲は同時期に編曲されたものと思われる。モーツァルトは、編曲にあたって、b5 つの短調を b3 つのハ短調に変更しているのは、演奏上の都合もあるだろうが、ハ短調－変ホ長調－ホ長調－ニ短調－ニ長調－ハ短調と調和を取るつもりだったのではないだろうか。残念ながら最後のハ短調は未完成に終わってしまったので、『5 つのフーガ』でまとめてしまったのだろう。本日の演奏会では、この『第 6 番』を追加して演奏することにする。新モーツァルト全集にはモーツァルトの自筆による 39 小節目までしか収録されていないが、バッハの原曲は 4 声で書かれているのでそのまま弦楽パートに割り当てて復元した。

1783 年 12 月 29 日、バッハ一族のフーガを知り尽くしたモーツァルトが至高のフーガを完成させる。それが、2 台のクラヴィーアのためのフーガ ハ短調 KV 426 である。モーツァルトの自筆譜の表紙には、Fuga a Due Cembali の題と共に di Wolfgang Amadeo Mozart mpia Vienna li 29 decembre 1783と記されている。ちなみに最後の数字は 2 を 3 に訂正した

跡があり、第一チェンバロの左手はテノール記号で書かれている。これはバロック時代の習慣に倣ったもので、ヴァン・スヴィーテン男爵のサークルを意識したものと考えられている。1788 年、ウィーンのフランツ・アントン・ホフマイスターから出版された際には、ヘ音記号に改められた。ちなみにこの曲には強弱記号が全く付けられていない。モーツァルトは、コンスタンツェの実家にあつた 2 台のフリーゲル（現代のグランドピアノのような翼型の大型のチェンバロ）を念頭に、あえてチェンバロのために作曲したのではないかと考えられる。

1788 年 6 月 26 日、1784 年 2 月から記録を始めた自作の全作品目録に、一つの曲が加えられる。「私がかかなり以前に 2 台のクラヴィーア用に書いたフーガのための 2 つのヴァイオリン、ヴィオラ、バスによる短いアダージョ」(KV 546)である。原語では、Ein kurzes Adagio. à 2 violini, viola, e Baſo, zu einer fuge welche ich schon lange für 2 klaviere geschrieben habe.と記載され、弦楽四重奏の体裁になっている。ところが、フーガの 110 小節以降の Baſo パートは Violoncelli と Contrabassi (それぞれ Violoncello, Contrabasso の複数形)が分けて記載されており、複数のチェロとコントラバスを含む弦楽オーケストラを意識して作曲されたことがわかる。編曲にあたっては、第 1 クラヴィーアの右手を第 1 ヴァイオリン、左手をヴィオラに、第 2 クラヴィーアの右手を第 2 ヴァイオリン、そして左手をバスに担当させて、その楽器順に書き出したが、8 小節を書いたところでこれらを削除し、通常通り、第 1 ヴァイオリン、第 2 ヴァイオリン、ヴィオラ、バスの順に書き直している。また、フーガのテンポ表示は Allegro Moderato と記載されたが、後で Moderato が激しく消されている。

1788 年 12 月 6 日、自作全作品目録に「6 つのドイツ舞曲」と記入したあと、「注記 11 月には、ヘンデルの『アチスとガラテア』をスヴィーテン男爵のために編曲」と書き込む。翌年 3 月 6 日、ヴァン・スヴィーテン男爵の委嘱で編曲した『メサイア』KV 572 がヨーハン・エステルハーギー伯爵邸においてモーツァルトの指揮で初演された。モーツァルトはヘンデル原作の 2 本のオーボエ、2 本のトランペットとティンパニに弦楽器という楽器編成から、2 本のフルート、2 本のオーボエ、2 本のクラリネット、2 本のファゴット、2 本のホルン、2 本のクラリノーとティンパニ、3 本のトロンボーンに弦楽器へと変更している。原曲にある有名なトランペットの独奏はホルンに移植されている。

1808 年にプラハ・クラインザイト・ギムナジウムの教授であ

るフランツ・ニーメチェックが書いた「皇王室宮廷楽長 ヴォルフガング・ゴットリーブ・モーツァルトの生涯 オリジナル資料に基づく」に次のような記載がある。

ヴァン・スヴィーテン男爵は、モーツァルトの才能を利用して、ヘンデルの偉大な楽想をモーツァルトの感覚の温かさで生き返らせ、彼の楽器法の魔力で私たちの時代でも享受しうるものにしよと考えたのだ。ヴァン・スヴィーテン男爵は、この事についてしばしばモーツァルトと書簡を交わしているが、ある時、モーツァルトに次のように書き送った。

「1789年3月21日

冷やかなアリアのテキストをレチタティーヴォにするという貴下のお考えは素晴らしいものです。貴下がテキストを手元にお持ちかどうかよくわかりませんが、ここにその写しを同封いたします。ヘンデルを厳粛かつ上品に装わせ、彼が現代人の嗜好にも合うようにすると同時に、今なお崇高な姿で立ち現われるようにすることのできる人物は、ヘンデルの真価を直感し、彼を理解し、彼の表現の源泉に到達し、確実にそこから何かを汲み取ることができ、また汲み取るであります。私は、貴下のなされたことをそのように理解しておりますし、断じてこれ以上申し上げる必要もなく、ただただレチタティーヴォが近日中に拝見できるのを望むばかりです。

スヴィーテン」

ただし、この手紙の自筆稿は残されておらず、手紙の日付が『メサイア』の初演よりずっと後であることなどから、この書簡の真正性は疑問視されている。1790年、モーツァルトは、ヴァン・スヴィーテン男爵のために『アレクサンダーの饗宴』と『聖セシリアの日のためのオード』を編曲する。モーツァルトは、幼少期にロンドンでヨーハン・クリスティアン・バッハに学び、イタリアではマルティーニ神父から対位法を学んだ。対位法の知識は、ザルツブルクでのミサ曲をはじめとする数々の教会音楽の作曲に活かされてきたが、ヴァン・スヴィーテン男爵と知り合ったおかげで、彼はバロック音楽を勉強しなおすことができた。これがなかったら、バッハやヘンデルの影響が色濃く残る『ジュピター交響曲』KV 551 や『ハ短調ミサ曲』KV 427 (417a)、そして『レクイエム』KV 626 は生まれなかったであろう。

1782年7月20日付の父への手紙の中で、モーツァルトは、父から頼まれているザルツブルクのジークムント・ハ

フナーの貴族爵位授与記念の祝賀会に使用する『ハフナー・シンフォニー』の作曲が、直ぐに着手できない理由を述べている。

いま、少なからぬ仕事があります。——来週の日曜日まで、ぼくのオペラを管楽器用に編曲しなくてはなりません。——さもないと、ほかのだれかが先手を打たれて——ぼくの代わりに儲けを横取りされてしまいます。それに新しいシンフォニーを一曲書かなくてはならないとは！——この種の作品を管楽器に合うように——しかも原曲の効果を損なわずに編曲するのがどんなにむづかしいか、あなたには想像もつかないでしょう。——そう、ぼくは夜ずっと、それにかかりきりです。ほかに、どうしようもありません。

1782年8月18日に行われた演奏会で、「音楽家モーツァルト氏の新作オペラ、題して『後宮からの誘拐』から最近ハルモニウムジークに編曲されたもの」が演奏された。この編曲者はヨーハン・ネポームク・ヴェントである。ヴェントは、アントーニオ・サリエリが楽長を務めるヴィーン宮廷楽団の第2オーボエ奏者であった。1782年当時の名簿が残されている。カペルマイスター・サリエリ以下、カペルマイスター代理1名、第1ヴァイオリン6名、第2ヴァイオリン6名、ヴィオラ4名、コントラバス3名、チェロ3名の名前の下に、管打楽器奏者の名前が並んでいる。モーツァルトがホルン協奏曲やホルン五重奏曲を献呈したライトゲープやクラリネット協奏曲やクラリネット五重奏曲を献呈したアントーン・シュタードラーの名前も見える。

オーボエ：	トリーベンゼー、ヴェント
フルート：	トゥアナー、メンシエル
ファゴット：	カウツナー、トゥルプア
ホルン：	ライトゲープ、クルツィバネック
クラリネット：	ヨーハン・シュタードラー、 アントーン・シュタードラー
トランペット：	ヨーゼフ・マイヤー、 カール・マイヤー
ティンパニ：	シュルツ

皇帝ヨーゼフ2世は、1782年の春に皇王室吹奏楽団を編成し、宮廷楽団の管楽器奏者たちを集めて宮廷の食卓音楽を演奏させたのである。そのためにオーボエ奏者のヨーハ



ン・ゲオルク・トリーベンゼーやヨーハン・ネポームク・ヴェントはオリジナルの室内楽を作曲するだけでなく、数々のオペラを管楽八重奏に編曲した。我々は、1987年2月22日に行った第6回定期演奏会で、トリーベンゼー編曲による『ドン・ジョバンニ』を取り上げた。ヴェントはモーツァルトの『イドメーネオ』、『フィガロの結婚』、『コシ・ファン・トゥッテ』など、40以上のオペラを管楽器用に編曲した。『魔笛』、『後宮からの誘拐』、『ドン・ジョバンニ』、『フィガロの結婚』、『コシ・ファン・トゥッテ』などは、フルート四重奏曲用にも編曲している。1783年12月21日付のクラマーの音楽新聞に皇王室吹奏楽団のメンバーが掲載されている。第1オーボエは、トリーベンゼー、第2オーボエ：ヴェント、第1クラリネット：シュタードラー、第2クラリネット：シュタードラー（兄）、第1ファゴット：カウツナー、第2ファゴット：ドリュューベン（こちらの方が第1より上手）、第1ホルン：ルップ、第2ホルン：アイゼン（ルップ氏より上手）であった。

ヴェントが編曲した『後宮からの誘拐』をオリジナルと比較してみると、フルート四重奏曲版は原曲に割と忠実に編曲されているが、管楽八重奏版は、聴き手が飽きないように、あるいは、奏者のために、アリアの導入部や繰り返しをカットするなど、大胆に変更されている。原曲では、クラリネットは曲によってC管、B管、A管の楽器を持ち替える指定になっており、ホルンもC管、B管、A管、G管、F管、Es管、D管が使われている。しかし、ヴェントの編曲では、変ロ調もしくは変ホ調のいずれかに変更されている。この理由は不明であるが、管楽合奏にはよく使われる調性である。こうすることにより、クラリネットはB管だけ用意すればよく、ホルンもB管とEs管で事足りる。ヴェントが編曲した『後宮からの誘拐』は以下の8曲から構成されている。

1. 序曲 変ロ長調（原曲はハ長調、ベルモンテのアリアのテーマによる中間部 *Andante* ハ短調と再現部はカットされている）
2. 第1幕 第1曲 ベルモンテのアリア 変ロ長調【セリムの宮殿前の広場、海の近く】 スペインの貴族ベルモンテの愛人コンスタンツェと侍女ブロンデが自分の下僕ペドリロともども海賊にさらわれ、トルコの太守セリムの後宮に幽閉されている。トルコにやってきたベルモンテが「ここで君に会える、コ

ンスタンツェ！」と歌う。（原曲はハ長調）

3. 第2幕 第9曲 ブロンデとオスミンのデュエット 変ホ長調 【宮殿の庭、片隅にオスミンの住居】 セリムがブロンデを女奴隷として後宮の番人オスミンに与えた。オスミンはブロンデがかわいくてどうしようもない。カづくでもブロンデを征服しようとする。「おれは行くが、警告しておくぞ」と歌い、ペドリロといちゃつくなど警告する。中間部の憂鬱な *Andante* で、女にこんな自由を与えるなんてイギリス人は頭がおかしいと決めつける。再び *Allegro* にもどって、激しく言い合う。
4. 第2幕 第8曲 ブロンデのアリア 変ロ長調 オスミンに追いかけてまわされるブロンデは「無理強いはいだめ、優しさが大事、優しくしたり、ご機嫌とったり」とオスミンを牽制する。（原曲はイ長調）
5. 第2幕 第15曲 ブロンデのアリア 変ロ長調 ベルモンテはイタリアで修業した建築家と偽って後宮に入り込む。ペドリロは、オスミンにキプロス産のワインを飲ませてベロンベロンにし、眠らせてしまう。そのすきにベルモンテはコンスタンツェと再会、ブロンデはそれを見て「喜びの涙が流れるとき」を歌う。
6. 第3幕 第19曲 オスミンのアリア 変ロ長調 【第1幕と同じ場面、片隅にオスミンの住居】 真夜中に、ベルモンテ、コンスタンツェ、ブロンデ、ペドリロの4人は梯子を用意して脱出を企てる。物音に気付いたオスミンが4人を捕え「おお、勝ち鬨をあげてやる」と拷問にかけて殺す喜びを歌う。（原曲はニ長調）
7. 第2幕 第12曲 ブロンデのアリア 変ロ長調 話は戻るが、ペドリロがブロンデにベルモンテが助けに来ていることを伝える。ブロンデは、フルート協奏曲 第二番 KV 314の旋律に乗って「なんという喜び、なんという楽しみが」と歌う。（原曲はト長調）
8. 第2幕 第14曲 ペドリロとオスミンのデュエット 変ロ長調 ペドリロは、オスミンを酔わせることに成功、共に「バッカス万歳」と歌う。（原曲はハ長調）

ヴェントに先を越されてしまったモーツァルトは、結局、『後宮からの誘拐』の管楽合奏版を編曲しなかったのであ

ろうか。1954年にチェコ・南ボヘミアのチェスキー・クルムロフにあるシュヴァルツェンベルク家の蔵書から2本のオーボエ、2本のイングリッシュホルン、2本のホルン、2本のファゴットのために書かれた『後宮からの誘拐』が発見された。編曲者は不明であったが、モーツァルトの手に寄るものではとの主張も一時はあった。しかし、少し短く、曲順が入れ替わっているものの、基本的にはクラリネットがイングリッシュホルンに変更されているだけでヴェントが編曲したものとはほぼ同一であった。ロジャー・ヘルヤーは、シュヴァルツェンベルクの管楽合奏団にはクラリネットがなかったためにイングリッシュホルンに置き換えられていたことを指摘し、フランツ・ギークリンクもモーツァルト自身の関与はないと結論付けた。1987年、オランダ人指揮者兼音楽学者のバステアン・プロムヘルトは、ドーナウエッシングゲンのフルステンベルク侯家宮廷図書館に所蔵されている楽譜は、モーツァルト独自の編曲によるものであるとの論文を出した。この曲の真正性は今後のモーツァルト研究にその判断を委ねられることになりそうだ。

1783年7月、モーツァルトは妻コンスタンツェを伴って父と姉が住む故郷ザルツブルクを訪れ、10月26日、聖ペテロ大聖堂で『ハ短調ミサ』を演奏して翌日ザルツブルクを後にした。フェッツクラブルク、ランパッハを経由し30日にリンツに到着したモーツァルトは11月4日に劇場で演奏会を開くことになる。10月31日トゥーン伯爵邸に滞在しているモーツァルトが父にあてた手紙には次のように記されている。

11月4日、火曜日、ぼくはこの劇場で演奏会を開きます。——そして、ぼくは1曲もシンフォニーを持参していないので、大至急、新しい曲を書きます。その日までに完成しなくてはなりません。——さて、終わりにしないといけません、もちろん仕事をしなくてはならないので。

このとき作曲されたシンフォニーが交響曲第36番『リンツ』K.425とされている。リンツに到着した10月30日はエーバスブルクの行政官シュトイラー氏の邸でオペラを鑑賞し、31日はトゥーン伯爵邸で「とてもお伝えできないほど」歓待を受けた。おそらくそこで11月4日の演奏会の話が持ち上がったのであろう。そうすると11月4日の演奏会まで残された時間はたった3日である。その間に、作曲は

もちろんのこと、パート譜の作成、オーケストラのリハーサルを行わなければならない。いくらモーツァルトと言えど、そのような神業が本当に可能であろうか。

その頃に作曲されたとされるシンフォニーがある。アダージョの序奏とアレグロ、アンダンテの23小節目まではモーツァルトの自筆で、残りの部分は他人の筆跡（誰が書いたのかは特定できていない）という奇妙な楽譜である。この曲は1907年までモーツァルトの交響曲第37番ト長調KV 444として知られていた。しかし、モーツァルトが作曲したのは序奏のみでアレグロ以降はミヒャエル・ハイドン（1737-1806）により1783年5月23日、ニコラウスIIホフマンの献堂式に付随した祝祭のために作曲されことが判明し、ケッヘルカタログ第6版ではKV Anh. A53と番号が振られた。ヨーハン・アンドレ、オットー・ヤーン、ルードヴィッヒ・ケッヘルは、このKV Anh. A53が、リンツで短期間に作曲された交響曲であると推定してきた。序奏を追加するだけであれば、3日で新しいシンフォニーを完成させることは可能に思われたからである。しかしこの楽譜はアラン・タイソンの研究で、モーツァルトがザルツブルクからリンツを経て1783年12月、ヴィーンに戻った後のみ、主に翌年2月から4月にかけて使用された五線紙であったことが明らかにされ、リンツで作曲されたという説は否定された。一方、交響曲第36番ハ長調『リンツ』KV 425は、1784年4月1日ヴィーンのブルク劇場で演奏されているが、トゥーン老伯爵のためにリンツで作曲されたことが、1784年5月15日、父にあてた手紙で明らかになっている。結局のところ、11月4日に演奏されたのは、こちらの交響曲らしい。

ザルツブルクの宮廷、教会で活躍したミヒャエル・ハイドンは宗教音楽だけでなく、40曲以上の交響曲、ディベルティメント、セレナーデ、様々な楽器の組み合わせによる室内楽と多くの曲を残しており、モーツァルトも生涯を通して少なからず影響を受けた。1783年、ミヒャエル・ハイドンはコロレド大司教から『ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲』全6曲の作曲を依頼されたが、そのとき病を患っていたので、完成できないで困り果てていた。折りしも妻と共にザルツブルクに滞在していたモーツァルトが、KV 423、KV 424を作曲して急場を救ったのである。ミヒャエル・ハイドンは、モーツァルトの自筆譜を友情の記念として大切にすると伝えられている。一方モーツァルトも1784年5月15日に父に宛てた手紙の中で、ミヒャエル・

ハイドンの新作交響曲 3 曲の総譜を持っていることを報告している。この KV Anh. A53 の原曲 Perger 16 ト長調もモーツァルトが交響曲第 39 番変ホ長調 KV 543 のモデルとした Perger 17 変ホ長調 (1783 年 8 月 14 日作曲) もそこに含まれていたであろう。ザルツブルク帰郷の折にこれらを手に入れたのかもしれない。アダージョの序奏をつけてモーツァルト作曲として演奏会で使用したであろうことは容易に推測できる。なぜなら 1784 年、数多くの演奏会を行ったモーツァルトは数多くの新作のシンフォニーを必要としたからである。ちなみにモーツァルトの妻コンスタンツェのいとこであるカール・マリア・フォン・ヴェーバーはミハエル・ハイドンの弟子であった。

2013 年 12 月 12 日

#### 【参考文献】

1. Fitz Kneusslin: Krl Friedrich Abel – W. A. Mozart, Symphonie op. VII, No.6 Es-Dur, Edition Kneusslin Basel (1976)
2. Dietrich Berke und Ulrich Leisinger: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie X: Supplement, Werkgruppe 28: Bearbeitungen, Ergänzungen und Übertragungen Fremder Werke, Abteilung 3-5: Sonstige Bearbeitungen, Ergänzungen, Übertragungen, Band 3: Übertragungen von Werken verschiedener Komponisten, Bärenreiter Verlag (2009)
3. Franz Beyer: Johann Sebastian Bach, Wolfgang Amadeus Mozart, Fünf Fugen für Streichquartett KV 405, edition kunzelmann (1972)
4. Dietrich Berke und Ulrich Leisinger: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie X: Supplement, Werkgruppe 28: Bearbeitungen, Ergänzungen und Übertragungen Fremder Werke, Abteilung 3-5: Sonstige Bearbeitungen, Ergänzungen, Übertragungen, Band 2: Bearbeitungen und Ergänzungen von Werken verschiedener Komponisten, Bärenreiter Verlag (2009)
5. Himie Voxman: Wolfgang Amadeus Mozart, The Abduction from the Seraglio, Arranged for 2 Oboes, 2 Clarinets, 2 Horns & 2 Bassoons by Johann Nepomuk Wendt, Musica Rara (1975)
6. Hansgeorg Schmeiser: Wolfgang Amadeus Mozart, Die Entführung aus dem Serail, Deutsches Singspiel in drei Aufzügen, Original Arrangement von Johann Wendt für Flöte, Violine, Viola und Violoncello (1997)
7. H. C. Robbins Landon: Mozart The golden years 1781-1791 with 215 illustrations, 32 in colour and 27 musical examples, Thames and Hudson (1990)
8. Charles H. Sherman: Michael Haydn, Sinfonia in G, Perger 16, Doblinger (1968)
9. Neal Zaslaw, William Cowdery : The Cmpleat Mozart, Norton (1990)
10. Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts 8. Auflage, Breitkopf & Härtel (1983)
11. Alan Tyson: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie X: Supplement, Werkgruppe 33: Dokumentation der Autographen Überlieferung, Abteilung 2: Wasserzeichen-Katalog, Bärenreiter Verlag (1992)
12. Alan Tyson: Mozart, Studies of the Autograph Scores, Harvard University Press (1987)
13. カール・フェルディナント・ポール 著, 海老沢敏・大久保一 共訳: ロンドンのモーツァルト, モーツァルト叢書13, 音楽之友社(1979)
14. 高野紀子 訳・解説: 最初期のモーツァルト伝, モーツァルト叢書18, 音楽之友社(1992)
15. スタンリー・セイディ編, 中矢一義・土田英三郎 日本語版監修: 新グローヴオペラ事典, 白水社(2006)
16. 属啓成 著:モーツァルト(II) 声楽篇, 音楽之友社(1975)
17. オットー・エーリヒ・ドイチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル 編, 井本响二 訳: ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア(1989)
18. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集I, 白水社 (1976)
19. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995)
20. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集VI, 白水社 (2001)